

▼今年の3月に送付しましたミニレターNo.60に、ホッケの資源量が近年著しく減少していることを書きました。そして昨年秋に生まれたホッケが今年の秋にロウソクホッケとなってたくさんオホーツク海沿岸に来遊することを期待すると書きました。その後、稚内水産試験場が調査船北洋丸を使用して日本海からオホーツク海にかけて行ったホッケ仔稚魚調査の結果、最近5年間の中では仔稚魚の分布量が最も多くなっているとのことでした。ホッケの再生産成功率、つまり親ホッケから生み出された卵のうち漁獲の対象となるサイズまで生き残った尾数の割合は、12月の表面水温と反比例する関係が知られています。水温が高いほど再生産成功率は低下し、生み出された卵が多くても漁獲されるサイズまで生き残る割合は低くなります。昨年12月の道北日本海沖合の表面水温は例年より低く、産卵～ふ化時期としては良い環境であって、生き残りが良かったと考えられます。この久々に発生の良いと思われるホッケを確実に漁獲対象となるサイズまで成長させ、さらに次の世代の資源を作るためにこれらのホッケを産卵させ、極端に減少してしまった近年のホッケ資源を回復させることが重要と考えます。そのためには昨年秋に生まれた小さいホッケの漁獲が多くなった場合は漁場を移動する、小さいホッケが網に入ったらなるべく放流に努めるなどして、大きくなるまで待ちたいところです。

▼そもそも現在のホッケ資源がどのくらいの資源水準にあるかということ、水産試験場の資源評価書によると道央日本海～オホーツク海におけるホッケの2016年度の資源水準は低水準で資源動向も減少となっています。今から20年ほど前の1998年には全道で20万トン以上の漁獲量がありましたが、昨年は2万トンに減少しています。ホッケの漁獲量はこれまで大きな変動を繰り返してきました。東京五輪のあった1964年には全道で20万トン近い漁獲がありましたが、1967年には6万トン台に、その後増加して1976年には20万トンを超えましたが、再び減少して1983年には4万トン台になりました。その後、漁獲量はまた徐々に増加して1998年に再び20万トンを超えたのです。このような過去のホッケ資源の大きな変動を見ると、再び資源を増やすことは可能と考えます。オホーツク海に来遊したホッケには秋から冬に日本海へ移動する群れと翌年の春までオホーツク海で過ごした後日本海へ移動する群れとがあります。日本海では早いものでは生後満2年で産卵し、3年目にはほとんどの個体が産卵します。小型の未成魚を捕らずに大型の成魚になってから漁獲すると漁獲重量と産卵量の両方を増やすことができます。

▼先日、「荒くれ漁師をたばねる力」(朝日新聞出版)という本を読みました。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、素人の女性が山口県萩市で漁業の6次産業化に取り組んでいる話です。中央水試でも日本海のアサリやウニについてスーパーやシェフなどの意見を聞きながら飼育や出荷方法を考える取り組みを始めています。漁業の1形態として萩市での取り組みがさらに発展して行くことを期待したいです。(網走水試 上田)